

競い合う社会から支え合う社会へ

牧野 直子

大地震を経験して

2024年の元旦、能登半島を大地震が襲いました。家族である正月のお祝いをしていた最中の出来事です。多くの犠牲者の方に哀悼の意を表するとともに、今も余震が続く中で電気や水が行き届かず、避難されている方に心を寄せ、私たちにできる協力を考えたいと思います。

私は今でも1995年1月17日阪神淡路大震災の時のことと思い出します。私は友人たちと1月21日に箕面のメイプルホールで「地球交響曲(ガイアシンフォニー)」という映画の自主上映会を企画していました。その直前の大地震です。上映を中止せざるを得ないと思っていたところ、前日にフィルムが私の家に届いたのです。これは「やれ!」というメッセージだと思い、上映会を予定通り行いました。すると当日、被災地からリュックを抱えた方が次々と来場され、会場は満員になつたのです。たぶん龍村仁監督がこめた映画のメッセージが伝わったのでしょう。あれから来年で30年。災害は忘れたころにやってくると言います。

地震という天災は人間の力では防ぎようがないまゝですが、たとえば多発する森林火災というのは人間がもたらした気候変動によるものです。また地球温暖化により北極の氷が溶けて水位が上がったり、そのためには津波が来たりという二次的な災害を生んでいるともいえます。自然への畏敬の念を忘れてはいけないと思います。「ガイアシンフォニー」の根底にもそのことが流れています。

戦争の中から見えてくるものは?

今年も昨年に引き続きパレスチナとイスラエルの攻防は、なかなか解決の糸口が見いだせない状況が続いている。テレビに映る子どもたちの姿に心が痛みます。この地域には長年の歴史的な背景があり、簡単にはいかないと思いますが、なんとか和解の方向に進むことを切に願っています。

「シャローム」という歌があります。「シャローム」

とはヘブライ語で「平和」を意味する現地の挨拶の言葉だそうです。この歌はパレスチナの人もイスラエルの人も知っているはずです。民族の長年の歴史の攻防があったとしても、今後はそれぞれがお互いに理解できる社会を目指したいのです。ロシアとウクライナでもそれぞれの国の立場があるでしょうが、資源の奪い合いではなく、それぞれの持てる力と知恵を集めて解決への道を模索すべきです。

平和憲法を持つ私たちにできることは?

本来なら平和憲法をもつ日本ならではの動きができるはずなのですが、現実にはアメリカの核の傘の中にいるので、結局は独自の動きができないのです。それどころか、敵基地攻撃能力を身につけ、防衛力を強化しようとしています。政府は防衛予算の増額をしたいところですが、次々と自民党の派閥の政治資金問題が明るみにてて、先送りせざるを得なくなっています。政治不信の中で、今私たちにできることは何でしょうか? まずは一番身近なコミュニティから自治力をつけることではないでしょうか?

「結みの」の今後を考える

「結みの」は今年2月に設立15周年を迎えます。

私は還暦を前に3期で議員をリタイアし、いずれ来る2025年問題に備えて15年かけてその土台づくりをしてきました。箕面を「誰もが生き生き暮らせるまち」にするために「育ちあい、分かち合い、助け合う」仕組みをつくりたいとの想いでした。

介護保険や健康保険だけでは解決できません。家庭を越えてお互いにそれぞれの持てる力を出し合って、信頼関係の中で支え合って生きていける社会を目指しましょう。

2024年度 総会 & 15周年記念イベント

2024年2月24日(土) 午後1時30分~3時30分

箕面文化・交流センター8階(箕面駅前サンプラザ)

人々に対面での総会です!